

2018年12月2日 川越教会

新しくされた私として

丸山 勉

[聖書] マタイによる福音書 28章 16～20節

さて、十一人の弟子たちはガリラヤに行き、イエスが指示しておかれた山に登った。そして、イエスに会い、ひれ伏した。しかし、疑う者もいた。イエスは、近寄って来て言われた。「わたしは天と地の一切の権能を授かっている。だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にきなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」

[序] クリスマス—新しい人生が始まる時

いよいよ12月を迎えました。クリスマスまであと3週間ちょっとです。慌ただしく過ごしてしまいそうになってしまっていますが、今年も主の御降誕をお迎えすることが出来る、その喜びを日毎にかみ締めながら、ご一緒に教会の歩みをさせて頂きたいと思います。

けれども今日の聖書箇所は、『聖書教育』誌に沿って学んでいますけれども、直接にクリスマスに関係する箇所ではありませんね。むしろ、福音書に記されている最後の場面、復活されたイエス様と弟子たちの出会いの箇所です。けれども、週報にも書かせて頂きましたけれども、この箇所を今日味わうことが出来ることは意味があると思いました。

改めて問うてみたいことは、「クリスマス」とはどういう意味がある日でしょうか？——ある牧師がこんなことを語っておられました。「クリスマスとは、**私たちが新しく造り変えられる日だ**」と。これは深い言葉だなと思われました。そして、本当にそうなのだなあと思ったのです。

確かに、毎年、歳時記のようにクリスマスはやってきます。けれども、この時を、何かクリスマス“らしい”雰囲気味わうことで終わってしまったらもったいないですよ。クリスマス**の光**というものは、**あまねくこの世界を照らすと共に、鋭い矢のように、私たち一人ひとりを貫くものである**と思います。そして、その光に貫かれた者は、あの羊飼いのように、又はあの東方の博士(学者)たちのように、**新しく人生が変えられていく**のです。では、その、造り変えられるとはどういうことなのか。それを今日のテキストは語っているように思いました。

[1] 復活のイエス様との出会い

今日のマタイ福音書の箇所は、復活された主イエスが、弟子たちと出会った所です。読んで頂いた 28 章 16 節にはこうありますね。「さて、十一人の弟子たちはガリラヤに行き、イエスが指示しておかれた山に登った。」この弟子たちは、(ユダはもうこの時はいなくて 11 人ですが) 皆、イエス様のもとを離れてしまった者たちでした。そしてイエス様は、こともあろうに、時の権力者たちや宗教者たちの手によって裁判にかけられ、死刑となり、十字架の上で殺されてしまったのです。

弟子たちからすれば、その前の日に、あの過越しの食卓(主の晩餐)を囲み、その食事の後、イエス様が夜の闇の中、ゲツセマネの園で祈っている、その場所に同行しているのです。…その後、短い時間の中で状況は急変し、あれよあれよという間に、あのイエス様が死んでしまった。自分たちはとて言えば、逃げてしまった。これは、想像を超えるようなショックだったと思います。これまでイエス様につき従っていたことは何だったのだろうか…。自らの不甲斐なさ、弱さというものに、もう絶望的になっていたと思います。

けれども、それで「終わり」ではありませんでした。「終わり」と思える所から始まる物語があったのです。それが、復活された主との出会いです。もっとも、このことが起こったのは、マグダラのマリアともう一人のマリアが、イエス様が葬られた墓の前で朝早く、「弟子たちに主が死者の中から復活されたことを伝えなさい。主は先にガリラヤに行っている、と告げなさい」という、主の天使の声を聞いたからです。そしてこの二人は走っていきました。同じ 28 章の 8~10 節をお読みします。

「婦人たちは、恐れながらも大いに喜び、急いで墓を立ち去り、弟子たちに知らせるために走って行った。すると、イエスが行く手に立っていて、「おはよう」と言われたので、婦人たちは近寄り、イエスの足を抱き、その前にひれ伏した。イエスは言われた。「恐れることはない。行って、わたしの兄弟たちにガリラヤへ行くように言いなさい。そこでわたしに会うことになる。」

復活された主にまず出会ったのは、この女性たちです。そしてこのマグダラのマリアたちが橋渡し役となって、弟子たちは、ガリラヤの山に行ったのですね。弟子たちは、最初はマリアたちが一体何のことを言っているのか把握出来なかったのではないのでしょうか?でも、それでも、彼らは山に行きました。これが大事なことなのかもしれないな、と思いました。内に閉じこもることなく、告げられた言葉に従ったのです。そこで、復活された主との出会いが起こったのです。

この時のことを「11 人の弟子たちは」と書いてあります。マタイは、他の福音書に書いてあるような個人的な弟子と復活の主との出会いの描写はしていません。例えばペトロや、トマスとの個別の出会いには書かれていません。マグダラのマリアにし

ても、他のマリアと一緒に出来事として書いてあります。言い換えると、マタイは、「群れ」に現われた主のお姿を書いています。信仰の共同体、つまり「教会」というものをいつも念頭においているようです。

[2] 疑いの心を持つ者に「近寄って」くる主イエス

しかし、マタイはまた、この信仰共同体すなわち教会に集められた者たちが、揺るがぬ信仰を持っていたとは理解していません。17節には、「そして、イエスに会い、ひれ伏した。しかし、疑う者もいた。」と記しています。私は、この言葉は、必ずしも疑うことが悪いといっている言葉ではないと思うのです。皆さんはどう思われるでしょうか？「疑う」ということは、「問う」ということでもあるのではないかと私は思います。誰かが言うからそのまま鵜呑みにする、というのは「盲信」ではないでしょうか？

「自分にとってこの方とは誰なのだろう？」と自分の頭で問うて、そして神様に、言わば体当たりをしていく。それが、神様・イエス様と私たちの関係を築くのだと思います。丁度創世記でヤコブが、天の御使いとがっぷり四つに組んで「私を祝福して下さいさらないのならあなたを離しません！」とあって組み打ちをしたように。

けれどもここでイエス様は、疑いを持った弟子たちに対して、何もおっしゃっていません。マルコの福音書では少々描写は異なるのですが、「その不信仰とかたくなな心をおとがめになった」（マルコ 16:14）とあります。しかし、そのマルコ福音書でも弟子たちを「もうお前たちはダメだ」と断罪している訳ではありません。むしろすぐそのあとで、「全世界に行って、すべての造られた者に福音を宣べ伝えなさい」（マルコ 16:15）と、弟子たちを世界宣教に派遣しているのです。マタイによる福音書もその構図は全く同じです。28:18 以下です。

「イエスは、近寄って来て言われた。「わたしは天と地の一切の権能を授かっている。だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼（バプテスマ）を受け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。」

私は、この「イエスは近寄って来て」という言葉に、とても慰めを感じます。信じたくても信じられない弟子たちに対して、そう、イエス様を一番肝心の所で見捨てて逃げた、イエス様を十字架に見殺しにしてしまった弟子たちに対して、その弟子集団に対して、——それは「教会」に対して、ということでもあると思うのですが——イエス様ご自身の方から近寄って来て下さったのです！これは「愛」以外の、「赦し」以外の何ものでもないのではないのでしょうか。

イエス様は、自分の信仰に挫折した者たちを、敢えて、その宣教に遣わされるのです。これは驚くべきことだと思います。——主は、「あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼（バプテ

スマ)を授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい」と、これまで内側に閉じこもっていた弟子たちを、「行け」(口語訳では「出て行って」)と、送り出すのです。それは、弟子たちが優秀だからではありません。イエス様が彼らを抑えて下さったからです。宣教の働きは、何より、神様ご自身のお働きですよね。その神様の働きに参与する者として、弟子たちを派遣するのです。決して弟子たちの力ではありません。

[3] イエス様の「権能」「権威」によって

そして重要なことは、イエス様は、弟子たちを派遣するにあたって、このようにおっしゃいました。「わたしは天と地の一切の権能を授かっている。だから、あなたがたは行って…」と。これが弟子たちが派遣される「後ろ盾」です。神様ご自身から、天と地を統べ治める一切の権能を与えられた復活のイエス様があなたがたと共にいるのだから、何も恐れないでよい、ということです。この「権能」という語は、エクサシアというギリシア語で、口語訳では「権威」という訳でした。新約聖書で、イエス様のお働きと結びついてよく用いられています。「権威ある者のように教えられた」とか「罪を赦す権威を持っている」とか…。つまり、それは相対的な人間の「権力」のようなものではなく、神的なもの、神様だけがお持ちの、誰もがその力を認めざるを得ない力としての「権威」です。

この神様の、イエス様の、「権能」(「権威」)を弟子たちは受けました。弟子たちは、この神様の力に覆われたのです。それがもっと明確になるのは聖霊の注ぎを受けた日、つまりペンテコステの時だと思いますが、ここで復活されたイエス様が遣わす、ということは、弟子たちはもう新しくされた者に造り変えられ始めているのだと私は思います。そして、このことは、今、この時代に、ガリラヤの山ではありませんけれども、イエス様が先にそこに行っているから、やっつけてきなさいと招いている「教会」に連なることを許されている私たちも、復活のイエス様の息吹を頂いて「新しい者」とされているのです。そこには十字架による赦しがあり、復活による新生と派遣が起こっているのではないのでしょうか。

私は、パウロが書いたエフェソの信徒たちに送った手紙の中のお祈りの言葉を思い起こしました。1:17以下です。23節まで読ませて頂きます。これは、復活の主と出会う私たち一人ひとりへの、本当に素晴らしい祈りだと思います。

「どうか、わたしたちの主イエス・キリストの神、栄光の源である御父が、あなたがたに知恵と啓示との霊を与え、神を深く知ることができるようにし、心の目を開いてくださるよう。そして、神の招きによってどのような希望が与えられているか、聖なる者たちの受け継ぐものがどれほど豊かな栄光に輝いているか悟らせてくださるよう。また、わたしたち信仰者に対して絶大な働きをなさる神の力が、どれほど大きなものであるか、悟らせてくださるよう。神は、この力をキリストに働かせて、キリストを死者の中から復活させ、天において御自分の右の座に着かせ、すべての支配、権威、勢力、主権の上に置き、今の

世ばかりでなく、来るべき世にも唱えられるあらゆる名の上に置かれました。神はまた、すべてのものをキリストの足もとに従わせ、キリストをすべてのものの上にある頭として教会にお与えになりました。教会はキリストの体であり、すべてにおいてすべてを満たしている方の満ちておられる場です。」

ここには、人間の世界を超えた究極的な希望があります。これを提供できる場が、キリストが生き給う「教会」であり、また、私たちはそのかしらなるキリストに捉えられ、生かされていると言っているのです。

「神の招きによってどのような希望が与えられているか、聖なる者たちの受け継ぐものがどれほど豊かな栄光に輝いているか悟らせてくださるよう。」

パウロは、自分が体験した救いの恵みが、どんなに神様の栄光に満ちたものであるかそれを体験しましたから、あなた方ももっとその恵みの奥行きを悟ってほしい、あなた方は、既に新しい霊の中に導かれているのです、と祈りながら語っています。

【結】「世の終わりまで、いつもあなた方と共にいる」

最近、電車に乗ると、とても人身事故が多いという印象を持ちませんか。この世の中、この日本、今、とてもあぶなっかしい国になっていると思えて仕方がありません。誰もが、うつ病になり得るような時代だと精神科医の方は言います。誰もが、「生きる」ことの危うさを抱えています。誰一人例外はないと思います。私たちの「生」の真の土台は何でしょうか？経済でしょうか、健康でしょうか？それが失われたら死ぬしかないのでしょうか？

先日、私が不定期にボランティアをしているある電話相談で、電話を取ると、その方が静かな声で「なぜ、あなた方の電話相談には「希望の」という名前がついているのですか」と仰るので、「それは私たちの祈りなのです。電話でつながること自体、希望が生まれることだと思っています」と申しましたら、「私はうつ病で苦しんでいるだけではなく、体もどんどん自由がきかなくなり、いつも悪夢ばかり見る。“希望”というものは「パンドラの箱」で、開けてしまっただけではいけないから、かえって苦しくなる。絶望の中で、しかし生き続けなければならぬことほど辛いことはない」というようなこととお話されて、どうしようと戸惑いました。

電話を受けながら、「神様、この方を今捉えてください。心に光を与えて下さい」と祈る思いでした。その方は、教会に行かれたこともあったようですが、詳しくは分かりませんが、もう行く気はしないとのことでした。でもこのように電話は下さっているということは、この方にとって孤独が一番苦しいのではないかな、と思いました。

その時に私はイエス様の十字架上の祈りを思い起こしました。「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」。そして私は「この訴えの祈りをされたイエスという方は、あなたの絶望を知っている方だと私は信じています。この方に叫ん

で下さい。このお方は、生きていて、必ず耳を傾けて下さいます。今日、こうやって繋がれて嬉しかったです。孤独を感じたら、またこのダイヤルにお電話下さい。あなたのためにお祈りをしています」と言いました。それが届いたかどうか分かりません。とても無力さを感じました。けれども、その方は最後に「今日は話を聞いてくれてありがとうございます。」と言って電話を切られました。

イエス様は生きておられる。このお方は、「**世の終わりまで、いつもあなた方と共にいる**」と、弟子たちと私たちに対して約束をなさったお方です。これは、マタイ福音書のクリスマスメッセージでもあります。「**インマヌエル＝神われらと共にいます**」。

神様の権威と言うのは、神の独り子でありながら、ひとり十字架に架かれ、人間の闇と罪と絶望を、とことんまで味わうことをなさった、インマヌエルである方の「権威」です。

このお方は、「**世の終わりまで**」、共におられる、と言われます。世の初めから終わりまでを、主は権能と憐れみを持って治められるお方なのですから、私たちのこの地上の存在の初めも、また終わりも、この方の愛に包まれているのですね。

クリスマスを迎えようとしています。イエス様が「近づいて」来て下さいます。この方と新しく出会いたいと思います。イエス様の派遣を頂き、新しい教会の歩みをしてゆきましょう。

お祈り致します。

神様、今日もみ言葉をありがとうございます。

あなたは、今日も私たちに「出て行って、わたしが生きていることを宣べ伝えなさい」と派遣して下さい。

弟子たちは、「こんな自分を神様は顧みて下さるはずはない」と絶望的になっていたと思います。しかし、主がその弟子たちを捉え、あなたの力で覆い、あなたのことを宣べ伝える器として造り変えて下さいました。

「誰でもキリストにあるならば、その人は新しく造られた者である」。

主よ、感謝致します。あなたを新しくお迎えさせて下さい。

私たちの教会を用いてください。クリスマスに喜びを一人でも多くの方と分かち合うことが出来ますように。

救い主イエス・キリストの御名によってお祈り致します。

アーメン。